

水道ジャーナリスト 有村源介の
源流 本流 汽水域
NO. 23 国策日程



10連休の問題点を指摘する報道（日経新聞）



輪番停電を伝える新聞（2011年3月14日、朝日新聞朝刊）

平成天皇の退位と新天皇の即位に伴い新元号が制定されることになるが、新元号が明らかにされていない現状では、世間の“旗印”は「平成最後の…」が決まり文句になっており（決まり文句にせざるを得ず）、何でもかんでも「平成最後の…」が付けられている。特にスポーツイベントがこれにフィットするとみえて、大相撲では「平成最後の九州場所」が喧伝され、稀勢の里は「平成最後の九州場所に4連敗して休場したから情けない」ということになり、貴景勝は「平成最後の九州場所で優勝したからエライ」となって、元号の切り替わりと合わせて力士の世代交代が語られたりする。情けなさも“エラさ加減”も何割り増しかの印象である。

新天皇の即位とまだ知らぬ新元号制定に伴い「祝日法」が施行され、来年のゴールデンウィークは10連休になる。当初、単純に「休日が増えて嬉しい」という反応や、「観光消費が活発になる」という楽観論が支配的だったが、10連休により社会システムに支障が生じ、リスクも大きい、という論調が日経新聞によりやく掲載され始めた。（写真：10連休頭痛い医療機関＝12月14日朝刊、GW10連休市場にリスク＝12月16日朝刊）

よくよく考えれば、ということなのかどうか、考えなくてもダメージが大きいのが定期刊行物業界である。連休期間中は休刊せざるを得ないだろうが、一般紙は勿論、業界紙であっても大手日刊紙・準日刊紙は、年間発行計画の中で休刊による売り上げの減少を吸収することができる。日本水道新聞のように週2回という新聞もあって、年間約80回発行しているが、これも80回という回数の中で売り上げを吸収出来よう。吸収と言うより、発行回数が多いので、吸収出来る形で生産計画を作成できるということか。

これに対して、絶対に休刊できないのが月刊誌である。休刊すれば1年間の12分の1の生産活動が失われるわけで、出版社の存続に関わることになる。現在においてすら年末から正月にかけての作業は厳しく、今年の場合、22（土）、23（日）、24（振替休日）の三連休が制約条件になってる。通常なら月末までに仕上げるものが、10日以上前に完了させなければならない。加えて、年明けは7日スタートとなり、やはり作業時間が短縮されるうえ、賀詞交歓会が続くため、かなりの作業を年内に済ませておかなければ、新年挨拶もままならないことになってしまう。つまり、12月は新年号全部と2月号のかなりの作業をしておかなければならなくなる。

そういう日程が来年4月27日から5月6日まで設定されることになる。定期刊行物の執筆者と編集者は印刷業に頭を下げながら頑張れば済む話かもしれないが、週2回、人工透析を実施しなければならない腎臓病の患者や救急患者、重大な手術を予定している患者と、それを受け入れる医療機関の対応は大きな困難が伴うことだろう。連休中は退院できる患者が退院できず、新規受け入れもできない、という指摘もある。この10日間、病気はするな、事故も起こすな、慢性病患者は我慢しろ、と言うに等しい。

ところで、「準国策日程」というべき措置が2011年（平成23年）3月下旬以降実施された。計画停電と節電である。某大手エンジニアリング企業では節電に協力すべく、午前7時始業・午後4時終業とした。これによって“犠牲者”が出た。その社員は都心の勤務先まで通勤に1時間半を要する、つまり、郊外の豪邸に暮らしているのであるが、午前4時起床、同5時に家を出て7時前には入社するという勤務形態を続けていた。しかし、商売相手は7時—4時に活動してくれるとは限らない。その形はむしろ、少数だったのではないか。午後4時以降、電話やメールがわんわん入ってくるし、加えて海外事業担当だったため、時差の関係もあって、東南アジアから遅い時間まで連絡が入ってきて、これに対応しなければならない。そのため、その社員は睡眠時間が3～4時間程度という生活を3か月続けていた。

この頃、丹保憲仁先生（元北大総長）を中心とする勉強会が中央大学で定期的に開催されており、かの社員も激務の間隙を縫うようにして勉強会に精勤していた。その社員がある日、勉強会後の飲み会が終わった時、ふらふらと倒れ掛かった。昏倒すれば即、救急車を呼んだが意識はあるし、どうやら疲労の蓄積らしいということで、同じ東急沿線に住む私が自宅までタクシーで送り届けることになった。遠方の豪邸まで送り、Uターンして東京近郊の小宅まで帰らなければならない。ふらふらの当人に「俺の帰りの分までタクシー代を出せ」と請求する訳にもいかない。現金は足りるのか、カードは使えるのか不安に思って財布を覗くと、タクシーチケットがあるではないか。しかも、某社と激烈に戦っている某ライバル社のものである。謹んで利用させていただいた。という訳で、無事に送り届け、それ以来、件（くだん）の社員は私のことを命の恩人として、会合で会うたびに頭を下げる羽目になったのであ

る。ことほど左様に、国が気楽かつ思慮浅はかに考える都合の様に、ことは運ばない、ということである。

もっと惨めだったらしいのは「プレミアムフライデー」であろう。もはや、それを口にする者はいない。そもそも、新橋や赤羽には「年中無休、24時間営業」や「朝9時開店、夕方5時閉店」という飲み屋がずっと前から存在しており、私のごとく依存的に昼間から飲みたい奴はとっくに愛用している。

人の飲み方までクダクダと「国策日程」を押し付ける愚と「祝賀10連休」の本質は同一であろう。